

特集
高知
〜いごっそうとはちきんの国 土佐〜

Special Features
Kochi
Country of stubborn men (Igosso) and lively women (Hachikin)-Tosa

元気なイベント
Lively events

四国アイランドリーグを米で応援する

一俵入魂百勝の会

川村一成

KAWAMURA Issei

一俵入魂百勝の会/代表



1—日本初の野球の独立リーグ誕生

2005年4月、四国に野球の独立リーグ「四国アイランドリーグ」が誕生した。発起人は西武ライオンズの黄金時代を牽引したあの石毛宏典氏。四国四県の各チームでリーグ戦を行いながら、プロ野球を目指す選手を育て、同時にこのリーグを通じて四国を元気にしてゆきたい。そんな石毛氏の熱い思いは共感をもって迎えらる一方で、成功を疑問視する声も多かった。何しろ、四国の人口は420万人足らずで、いかにも市場が小さい。それに大企業は少なく、スポンサー収入もあまり期待できないのではないかと。

2—お金はないが、米ならある

前年の9月、石毛氏の「独立リーグ」構想をたまたまカーラジオで聴いていた元高校球児の畦地履正と迫田司は、実に素直に感動し、飛びついた。

「日本初の独立リーグを四国で、というのは何と嬉しい話じゃないか」

「なんとか応援したいね。スポンサーにでもなる？」

「スポンサーといってもそんなお金はないよ」

「お金じゃなくて、たとえば米を提供するというのはどう？」

「おもしろい。こんな話、相談するのはやっぱり専業農家で地域づくりのリーダー、一成さんだね」

かくして小生に畦地くんからの電話が鳴った。ところが私は野球とはほとんど無縁の身。ウン十年サッカー一筋なのだ。

「米で応援というのは面白そうだが、今ひとつ話が見えない。分かりやすい企画書を作ってくれ」

それからおよそ1ヶ月、ほとんど忘れかけていたころ、ファクシミリから一枚の紙が吐き出された。

(四国に野球の独立リーグができる)→(スポンサー募集中)→(応援したいが金はない)→(そうだ、米ならある)→(米を選手に食べさせよう)→(それって、もしかして、百姓がスポンサー)

これが企画書と言えるかどうかは別にして、単純明快、分かりやすく、面白い。乗りましょう。そのとき丁度一緒に飲んでいて、少年サッカーの教え子で、今は県立スポーツ施設職員の竹内和也にそれを見せた。

「これ、めちゃ面白いっすね」

これで決まりだ。

3—百姓スポンサーと全国サポーター

明けて2005年。私が関係する「文化の県民ネット」「こうち元気者交流会」「AS奈路倶楽部」などのメンバーに声をかけた。乗りの良いのが高知の県民性、乗りの良い百姓はもちろん、デザイナー、カメラマン、ライター、カリスマ主婦などが話しに乗ってくれて、企画会議と称する飲み会を重ねた。

会の名前は「一俵入魂百勝の会」。農家に米を提供してもらう。目標1,000俵。500俵は選手に、あとの500俵



■写真1—言いだしっぺの二人。左、畦地、右、迫田



■写真2—私も百姓のせがれ。米の重みはよくわかる



■写真3—冗談のような話が、こんなことになる



■写真4—せっかくだから積極的に楽しむ。オレっ!

は全国の応援してくれる人たちに買ってもらう。買ってもらったお金の一部を事務経費とし、残りをリーグに寄付する。提供者を「百姓スポンサー」、買ってくれる人を「全国サポーター」と呼ぶ。

これは面白いシステムだと同自画自賛。ちなみに米一俵2万円とすると1,000俵で2千万円。これって立派なスポンサーだ。野球の独立リーグが日本初なら、米で応援のこのシステムも日本初だ。

4—石毛氏、こじゃんと喜ぶ

独立リーグ(正式名称は「四国アイランドリーグ」)開幕2ヶ月前、石毛代表を招き、企画を提案した。独立リーグとはいえ一応みんな俸給をもらう職人。プロの野球リーグを米で応援なんて前代未聞。石毛氏の反応やいかに、と我々はもちろん、10社にのぼるマスコミの方々も固唾をのんでいた。

「このリーグは地域密着を目指しています。秋のドラフトでの指名が大きな目標だが、このリーグができたことで、どれだけ四国が元気になったか、リーグ発足の評価はそれで判断して欲しい。その意味でも、米で応援してくれるというのはまさに地域密着、本当に有難い。私も百姓のせがれ、中学校まで随分と農作業をしていました。だから米の重みはよくわかる」と石毛氏は我々に親指を立ててみせた。企画を全面的に受け入れてくれたのだ。

ここから急展開。3月には「一俵入魂



■写真5—オリジナルのお米アイスもできてしまった



■写真6、7—純米吟醸宇宙酵母仕込みのお酒も登場



百勝の会」設立総会。場所は私の地元の奈路公民館。ど田舎こそ、この会にふさわしい。もちろん石毛氏も出席し、熱き思いを語って参加者を感動の渦に巻き込んだ。

この会で代表に選出された私は、初仕事にマツケンサンバを踊った。フィニッシュでは、金ぴかの着物の裾を腰元にめくって貰うと、そこには「一俵入魂」と書かれた赤ふんどしが。石毛氏、南国市長、教育長はじめ一同哑然。

こうして一俵入魂百勝の会は公式にスタートした。

5—誰にもできる「一〇入魂」

一俵入魂の発想の面白いところは、もともと野球の「一球入魂」をパロっているだけに、「球」「俵」のところに、それぞれの得意分野の漢字一文字を入れたら、いくらでも応用がきき、支援の輪が広がるということ。「あなたにもできる一〇入魂」を提案したところ、次々と協力の手が挙がった。

最初は、十和村(今は四万十町)の酒井おばあちゃんが、50年ぶりに記憶と指先を思い出しつつ、本物の藁の

米俵を編んでくれた。これは、石毛代表へのプレゼンテーションの時、設立総会の時、開幕戦の時に、すばらしい象徴となった。正真正銘の「一俵入魂」だ。

宅配業者は格安に米の集配をしてくれることになり「一急入魂」。印刷屋はチラシをタダでやってくれて「一刷入魂」。マスコミ各社は積極的に報道してくれて「一報入魂」。カメラマンは「一写入魂」。ライターは「一筆入魂」。米の低温貯蔵庫を使わせてくれる農協は「一蔵入魂」など。

また、アイスクリーム屋は一俵入魂米を使った「お米アイス」を新作して「一氷入魂」。不思議な食感が好評。創業220年の中土佐町の酒蔵は、一昨年の全国新酒鑑評会金賞受賞の勢いで、純米吟醸 百勝の酒 四万十川源流水仕込み 清酒「一俵入魂」を世に出してくれた。この酒は「宇宙酵母」を使い、新酒は端麗フルーティー、夏を越したら芳醇まろやかで、日ごろ焼酎一筋の男やワインならという女性にも人気の酒となっている。この酒を飲めば、さながら「一献入魂」か「一酔入魂」となる。

6——右袖のサプライズ

開幕が近づくにつれ、四国アイランドリーグはマスコミを賑わした。トライアウト(選手選考会)の参加者は全国から何と1,100人。その中からプロ野球経験者の監督・コーチたちによって100人がセレクトされ、投手・野手のバランスを考慮しながら4県4チームに25人ずつ所属が決められた。

その時、「今日のテレビ見ました? すごいですよ」の電話。言いだしっぺの畦地からだ。「見たけど、何か?」「ユニフォームの袖ですよ」。なんと高知ファイティングドッグスのユニフォームの右袖に、「一俵入魂」の文字が躍っているのではないか。地域密着の応援を真っ先に始め



■写真8—石毛氏は漢だ。こんなはからいなかなかできない



■写真9—開幕戦のセレモニーに積まれた俵。戦利品のように見える

た我々への、石毛代表からのビッグなプレゼントだったのだ。

ちなみに、2年目には、ある公式スポンサーから「一俵入魂の会は金を出してない。消して、うちに譲れ」という話があったそうだが、高知ファイティングドッグスの藤城監督が「何をおっしゃる。あの人は最初から、金はないから米でとって応援してくれている。米の提供がどれだけ有難いことか。絶対に譲るわけにはいかない」といつてくれたそうだ。この話を聞いた一俵入魂の世話役たちは涙、涙。なお一層の奮闘を誓ったのである。

7——一俵入魂プレゼント

私たちの最大の仕事は、米を集めること。副代表で専業農家の武市憲雄は「南国市米地産地消の会会長」「南国市地域活性化連合会会長」など幅広く活動しているだけに、結成総会までに数十俵の予約をとっていた。役員で一番若い竹内和也は、友人・知人に電話をかけまくって、通常1万円前後の携帯電話代が、3~5月は4~5万円。一人で50人もの予約をとり一同驚くが、「きちんと話をしたら9割の人が乗ってくれますよ」との弁。本人は多少迷惑だったようだが、いきなり「営業



■写真10—お米の炊き方教室



■写真11—田植えも選手のトレーニング♪



■写真12—フットワークがネットワーク。俵が軽く見える



■写真13—百姓スポンサーとサポーターと選手が栄光を誓った

部長」に抜擢だ。

それからというもの、一俵入魂が話題を振りまけば、四国アイランドリーグも盛り上がるぞ!とばかりに様々な企画とイベントを開催した。

4月の「米の炊き方教室」では、西土佐村(今は四万十市)「山間米組合」の中脇裕美さんが「キン、シヨキシヨキのリズムで手早く。研ぎ過ぎると旨味も流れるよ」と指導。

6月には、「米のありがたみを選手に体感させて下さい」と藤城監督の要望もあり、十和村でファンと一緒に田植えツアーを開催。

7月には、百姓の行事にならって前半戦の高知ファイティングドッグスの慰労と激励をする「田休み大集会」を開催。これらの活動はマスコミにも幾度となく取り上げられ、選手・スポンサー・サポーターの一体感を深めていった。

また、他県の3チームにもお米を直接届け、球場で贈呈式を行うことで一俵入魂の活動をアピールした。始球式にまで、参加させていただいた。

年末には「大望(忘)年会」を開催。1年目は高知ファイティングドッグスが優勝したので「優勝祝賀会」と合わせ100人を超える集いとなり、「一俵入魂が勝手に選ぶMVP」表彰などで盛り上がる。

8——3割3分は超一流?

1年目に提供を受けた米は330俵、約20トン。うち180俵が4球団の選手の胃袋に収まった。これは丼飯に換算すると64,800杯分。4チーム100人の選手が毎日丼飯を2杯近く食べたことになる。残りのうち100俵をサポーターに販売、50俵は2年目の収穫の秋までの選手用とし、経費を引いた剰余金50万円を四国アイランドリーグに寄付した。

目標1,000俵に対して330俵は3割3分で、野球じゃ超一流バッターだ、などというのは「我田引水」もいとこ

ろだが、この言葉、そもそも百姓の米づくりから生まれたものということでご勘弁を。

9——2年目そして3年目

リーグ1年目の四国アイランドリーグの収支は3億円の赤字。2年目は半減したとはいえやはり膨大な赤字。観客数も伸びない。普通なら前途を悲観する声が満ち溢れそうなものだが、せつかく始まったものなら、「楽しむ他ない!」ではないか。現に、新しい仲間と出逢い、新しい交流が始まり、なにより楽しい酒が随分飲めた。

私たちが魁に「土佐闘犬応援団」「ファイティング娘」「フラワーズ」などのチアグループ、町ぐるみで応援の「はりまや橋商店街」、野球教室でお世話になった各地の少年野球チーム、土佐山田町を筆頭とする使用球場のある市町村、「自分にできることは何か」をみんなが探し、活動が始まっている。

「お金はないが米ならある!」「食は生きる基本。腹が減っては野球はできん。選手に米を食べらそう!」という発想から始まった「一俵入魂」は、百姓が支える全く新しい「応援スタイル」と「人の集まり」を提案することになった。

プロスポーツには無縁の高知に突然誕生した野球の独立リーグを、そして夢に向かって奮闘する若者を応援するのは、嬉しく、楽しく、面白い。そして今、あの人も、この人も、おらんく(おれたち)チームの「応援の輪」が、ゆっくりではあるが着実に広がっている。

なお、四国アイランドリーグは、創立2年目には各チームがそれぞれ株式会社として分社化された。米の提供者のほとんどが高知ファイティングドッグスの応援者だったこともあり、3年目以降は高知ファイティングドッグスを米で支援することになっている。

米のある人はスポンサーに、無い方はサポーターに、あなたにもできる「一俵入魂」、一緒に踊ってみませんか。